

「からだ」という空間

—フェミニスト地理学の誕生からロビン・ロングハーストまで—

久島 桃代*

Momoyo KUSHIMA

Space called bodies: from the birth of feminist geography to Robyn Longhurst

1 はじめに

「はじめるのは、しかし、大陸や国や家からではなく、いちばん身近な地理からにしよう—からだから。ここなら少なくとも私は知っている。」(リッチ1989:312)

「たぶん私たちは、『身体the body』という言い方を一時停止する必要があるだろう。“the”がついたせいで、からだは抽象化されてしまうこともありうるからである。“the body”と書くと、特殊なものは何も見えてこない。『私のからだ my body』と書くと、私の生きてきた経験のなかに、特殊性のなかに投げ込まれる。傷あと、変形、変色、損傷、失ったものが見えてくる。気に入っているところも見えてくる。」(リッチ1989:315-316)

『「いちばん身近な地理からにしよう—からだから…受胎能力の政治学』。この論文では、ここから始めることが重要であると主張したい。このようなアプローチが、地理学の論理的な首尾一貫性を混乱させる上で、またそこに欠けているものやその男性中心主義(musculinism)をあらわにする上で、有用かもしれない。」(Longhurst 1994a:214)

現代アメリカを代表する詩人で、フェミニスト批評家であるアドリエンヌ・リッチ(Adrienne Rich)。リッチの思想に影響を受け、彼女と同様「いちばん身近な地理から」地理学を考えようとする研究者、ロビン・ロングハースト(Robyn Longhurst)。それぞれ、活動の場こそ異なるものの、みずからの経験を深く掘り下げ、抽象的な観念としてではなく、具体的な物質としての「からだ」の経験を通して言葉と思想を紡ぎ出そうとしているところに、共通点がある。

1970年代、アメリカやイギリスの地理学を中心

に、それまでの地理学に飽き足りない女性研究者たちが、独自の問題意識を持って新しい地理学の形を模索し始めた。それは、「人間」を対象にするといいながら、実際には男性の視点に偏っていた地理学を作り直すことを目的としていた。こうした英語圏のフェミニスト地理学の動きは、翻訳やレビュー論文等の形で日本の地理学にも紹介され(吉田1996;丹羽1998;ローズ2001;『ジェンダーの地理学』2002)、日本独自の実証研究も蓄積されて(影山2004;木村2006, 2008;吉田2007;村田2009;熊谷2015)、フェミニズムは地理学の中でもはや無視できない存在となりつつある。しかしながら、日本のフェミニスト地理学の中には、依然として検討され尽くしているとは言い難いテーマが存在する。それが本稿のとりあげる、「からだ」に関わる議論である。

フェミニズムの運動に参加する女性たちにとってからだは、男性と同等に扱われるために克服すべきハンディとみなすにしろ、逆に、男性にはない「聖なる母性」が宿る場として賛美するにしろ¹⁾、真剣に考えるべき課題として強く意識されてきた(荻野2014)。それは、欧米と日本、いずれのフェミニズム運動においても共通してみられた特徴だった。また、まだ社会的に問題視されていなかった女性たちの葛藤や閉塞感を訴える原動力となったのも、彼女たち自身のからだが発する悲鳴であった。しかし、こうした女性の生身のからだの経験は、いまだ十分に日本の地理学で扱われてきたわけではない。

そこで本稿では、からだをめぐる議論を英語圏のフェミニスト地理学がどのように論じていったのか、また、それが空間や場所の問題にこだわるフェミニストたちにとってどのような意味で重要だったのかを考えていきたい。近年の英語圏の文化・社会地理学では、物質論的転回(material turn)の動きと相まって、身体の物質性を意識した研究が急増してい

* お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所 特別研究員

る。その動きは、森(2009, 2011)等によって日本の地理学にも紹介されてきたし、また、東日本大震災後のボランティア活動というみずからの体験をもとに、このような状況下で構築される社会的つながりを物質性という視点から論じた中島(2014)のような仕事も現れている。では、フェミニスト地理学者たちのからだをめぐる議論は、この流れの内部に収まりきるものだろうか？私はそうではない、と考えている。彼女たちの言葉と思想は、時には物質論的転回の動きと絡み合いながらも²⁾、そこにはやはり、人間を印づける様々な差異の一つとして、「女性」という性差を見失うまいという問題意識が感じられるのである。彼女たちの議論は、別個に論じられる必要があるのではないだろうか。

地理学の中で物質的な肉体としてのからだが無視されてきた経緯については、ジリアン・ローズ(Gillian Rose)の『フェミニズムと地理学：地理学的知の限界』の翻訳(2001, 原著は1993)によって、日本の地理学にも詳細に紹介されてきた。しかし、この空白をフェミニスト地理学者たちが具体的にどのように埋めていったのかという問題については、依然として十分に議論されていないと思われる。そこで本稿では、この分野において積極的に論文を発表し続けてきた、ニュージーランドのフェミニスト地理学者ロビン・ロングハーストの議論の内容をみていく。彼女は1990年代から現在に至るまで、一貫して女性のからだにこだわって、これと空間との関わりについて多くの論文を発表してきた。そして、からだを抽象的な概念としてではなく、快／不快の感情や、肉体的な痛み等の五感を持つものとして理解し、研究対象者である妊婦たちの空間の経験をより具体的に探ろうと試みてきた。妊婦のからだに対する彼女の理解は、自身のからだの経験に深く根差したものであり、自分たちの足元から女性としての生き方を問い直していったフェミニズム運動の思想を受け継ぐものである。

本稿の構成は以下のとおりである。続く「Ⅱフェミニスト地理学における身体」では、フェミニズムの影響を受けた地理学者たちが、“human” geographyを名乗りつつ、その実、男性視点、男性のための地理学であった既存の地理学を、いかに女性に対して開かれたものへと再構築していったのか、その過程を概観する。とりわけ、ジェンダーという概念を手にしてからの動向に着目する。フェミニスト地理学者たちは、女性の男性に対する服従の根拠として持ち出されてきた性差が、実際には政治や社会と分かちがたく結びついたジェンダーに過ぎないと訴

え、身体に対してラディカルな視座を持ち込んだ。この動きは、生身のからだを正面から扱うことを避けていた点で課題が残されたが、妊婦の経験を個人的な問題として済ませずに考えようとするロングハーストの研究に重要なヒントを与えた。「Ⅲロビン・ロングハーストの妊婦研究にみるからだと空間」では、はじめにロングハーストの経歴を概観し、それから彼女の研究の具体的な中身に入る。そして、その意義と課題について検討していく。最後の「Ⅳおわりに」でこれまでの議論をまとめ、結論を述べる。

具体的な検討に入る前に、本稿における「からだ」「身体」という言葉の表記について説明しておきたい。地理学全体においても、フェミニスト地理学においても、そこでの身体の議論がすべてリッチやロングハーストと同じように、物質的、肉体的なものとしてからだに着目しているわけではない。そこで本稿では、リッチやロングハーストの見解に沿って身体を議論するときは「からだ」を、そうでない場合は「身体」という言葉を使用することにする。

Ⅱ フェミニスト地理学における身体

1. ジェンダー概念の導入

本章では、英語圏地理学におけるフェミニズムの影響と、そこで身体の議論がどのようになされたのかを確認する。1970年代半ばからの英語圏でのフェミニスト地理学の展開については、すでに吉田(1996)において示されているし、代表的な文献の翻訳がいくつもなされている。そのためここでは英語圏のフェミニスト地理学の足跡を一つ一つ詳細に辿るということはせず、本稿の主題であるからだや身体の問題に直接関わる部分を重点的に吟味する。

1970年代に地理学で芽生えたフェミニズムは、1980年代を通じて開花した。初期のフェミニスト地理学が、女性地理学者の立場の確立と地理学的研究における女性問題の可視化に力を注いだのに対し(例えばバーネット1999; Zelinsky 1973)、1980年代中頃になると、地理学の研究に「女性を加えてかき混ぜる」(マクドウェル2002a:27)だけでは、地理学に根強い性差別主義を取り除くことに限界があることを悟るフェミニストたちが現れるようになった。これまでの地理学が、女性の経験を欠落させた男の、男による、男のための学問であったとするな

らば、そこにはそうしたものの見方、考え方を正当化する論理があったはずである。そのような論理を根本から問い直していかない限り、いくら女性に関する研究が増えたとしても地理学の男性中心主義を変革することはできないと考えられるようになった(WGSG 1984; モンク&ハンソン2002)。

地理学を覆ってきた男性中心主義にアプローチする上で、フェミニストたちがジェンダーという概念を手に入れたことは重要であった。1970年代以降、女性学やジェンダー研究者の間で使用されるようになったこの概念は、それまで自然で自明なものとして捉えられてきた性差を、セックス(生物学的差異に基づく生得的な性差)とジェンダー(セックスに基づいて構築された社会的性差)の二つの次元に分ける。そして、性差を根拠に自然化されてきた性別役割(女の仕事/男の仕事)が、その実女性の男性に対する服従を正当化するための都合の良い性差の解釈の結果(=ジェンダー)に過ぎないことを告発した。

ジェンダーという概念を手に入れたフェミニスト地理学は、大きく分けて二種類の研究へと向かっていった。その一つが、その男性中心主義を維持していくために、地理学が性差の問題をどのように意味づけてきたのか、つまり、「地理学のジェンダー」を明らかにするものである。ジリアン・ローズの『フェミニズムと地理学：地理学的知の限界』(2001)をはじめ、地理学のジェンダーを扱った研究は地理学において性差がどのように捉えられ、それがいかにして地理学の男性中心主義(女性の締め出し)へと結びついていったのか指摘してきた。ローズによれば、デカルト以降の合理主義という知の形態では、合理性、徹底性、普遍性こそが求められるべき「真実」の条件となる。そして、自己の身体、感情、価値観、経験などから自分自身を切り離せる主体=男性こそが、そうした真実を追求するに値する主体として想定される(ローズ2001:18)。つまり、研究という活動にはかなりストイックな姿勢が求められ、そしてそれは男性によって可能になると考えられたのである。これに対し、女性は、自己の身体、感情、価値観、経験などから世界をみる主体として理解され、つまり、自身の身体が置かれている位置を超越できない主体として理解される(ローズ2001:20)。こうした、身体を理性と対置して低く置き、その身体と女性とを結びつける女性蔑視的な性別観が、合理性、徹底性、普遍性を追求する地理学の中で、男性中心主義を正当化させてきたのである。

また、このような考え方からわかるように、男性

中心主義的な地理学では世界を二項対立的にみる考え方が基本となる。しかもこの二項対立は、「男らしい」概念と「女らしい」概念に分けられ、どちらにも当てはまらないようなあいまいな存在は排除される。また「女らしい」としてジェンダー化された概念もまた、合理性、徹底性、普遍性を追求する知にそぐわないとして、無視されたり、価値のないものとして顧みられてこなかったりした。それが、身体であり、自然であり、女性等であった。

ジェンダーという概念を手にしたフェミニスト地理学者たちが着手したもう一つの研究は、空間がジェンダーの構築にいかなる役割を果たしているのかを見極めるものであった。これらの研究は、社会の中で放置され、一つの風景を作り上げるまでになっている性差別を見過ごさず、そうした性差別の空間化がいかにこの問題を助長するものなのかを探求し始めた(例えばMassey 1994)。それは言い換えれば、「男性であること」「女性であること」の意味を空間から読み取ろうとする試みであると同時に、空間が、こうした男性らしさ、女性らしさの再生産、つまりジェンダーの再生産にどのように関与しているのかを見極める作業であったといえる。このように、空間を社会の単なる「容れ物」としてではなく、社会の秩序の維持に積極的に関与するものとして問い直していく動きは、フェミニスト地理学をはじめとして1980年代後半から地理学全体で盛んになっていき、「文化論的転回」³⁾と呼ばれている。

2. 空間としての身体

ジェンダーの構築の上で空間が果たす役割が明らかになるにつれ、空間と性差という、以前であればいずれも自然で自明なものとして捉えられてきた存在が、実際には社会と不可分に関わりながら構築されるものであることが認識されるようになった。そして、身体を国家や地域のような一種の「空間」として捉える見方が、1990年代を通じて地理学者の間で受け入れられていった(Valentine 1999)。ジェンダー研究者と同様、「障害」という切り口から身体にアプローチする地理学者たちも、非常に個人的なものだと考えられてきた身体が、実際には個人と社会との利害がぶつかり合う最も日常的な空間にほかならないとの認識を深めていった(Butler and Parr eds. 1999)。身体に対するこのような認識は、社会全般からみれば決して新しいものではない。1960年代後半から1970年代にかけて、アメリカや日本でのフェミニズム運動の中で広がった「女の健康運動」は、生

殖の問題が法律や医師たちの管理下に置かれていることに対する女性たちの異議申し立てであり(荻野2014)、「私の身体に歴史と政治がクロスする生々しい実感」(米津1991:111)を運動に参加する女性の多くが持っていたと考えられる。類似のことは、障害者運動にもあてはまる⁴⁾。つまり、身体が個人的なものであると同時に非常に政治的、社会的なものであるという見方は、1990年代にはすでに社会に浸透していたと思われ、地理学における身体という空間の発見は、なかば必然的な出来事だった。

こうして地理学は、それまで自然科学の領域に押しやり、研究テーマとして真剣に取り上げてこなかった身体を、他の空間と同じく政治や社会と相互に関わる問題として論じる手立てを見出していった。身体を空間として考察する研究には、後でみるように身体の物質性を重視する立場から批判も寄せられたが、純粋理性と対置され、社会科学の研究対象としては低く見られてきた身体を議論の俎上に載せたことは非常に大きな前進であった。次章では、ロビン・ロングハーストの妊婦研究によって、身体をめぐる地理学的研究がさらに展開していく過程を検討していく。

III ロビン・ロングハーストの妊婦研究にみるからだと空間

1. ロビン・ロングハーストと研究の概要

ロビン・ロングハースト教授は、ニュージーランド北島にあるワイカト大学で教鞭をとる社会・文化地理学者である。大学ホームページに掲載された自己紹介文とLonghurst(1994b)、Longhurst(2001)を参考に彼女の経歴を整理すると、以下のようになる。彼女は、フェミニズム、ジェンダー、セクシャリティ、からだに関する研究を専門とする地理学者だ(The University of Waikatoホームページ 2016)。Longhurst(1994b)によれば、1984年にワイカト大学にて修士号(地理学)を取得、その後1992年に身体と場所に関する博士論文を執筆するため再び母校に戻った。このとき彼女は産後間もなかった。同時に、1年間の契約でフェミニスト地理学の講師としてワイカト大学に雇用されている(1994年と1995年に学術誌に掲載された論文で肩書が「講師」となっているところを見ると、この契約はその後更新されたようである)。そして、在学中、再び妊娠・出産を経験し、

1996年に「地理は重要だ：公共の場所における妊娠女性のからだ」というテーマで博士論文を同大学に提出した(Longhurst 2001)。

さて、彼女の研究内容について述べる前に、ここで、ワイカト大学 The University of Waikato の地理学部とフェミニズムの関係について少し触れておきたい。ワイカト大学の地理学部においてフェミニズムの特色が色濃くなったきっかけは、1978年、フェミニスト地理学者であったアン・マギー(Ann Magee)が同大学に着任し、1980年代初頭にかけて女性学センターの創設と地理教育の双方で重要な役割を發揮した頃にさかのぼる。さらに1987年には、フェミニスト地理学者のルイズ・ジョンソン(Loise Johnson)が着任し、学部課程におけるフェミニスト地理学の教育に尽力した。彼女の学部生に対する教育については、Johnson(1990)に詳しく紹介されている。彼女は、「オーストラリアの女性:ジェンダー化する空間」(2年次)、「フェミニスト地理学:批判と構築」(3年次)という二つの科目を担当し、既存の地理学の枠にはめてフェミニズムやジェンダーを理解するのではなく、フェミニズムを通じて地理学の常識となっていた言説や認識論を根本から問い直すことを目指した。1980年代の終わり頃には、スタッフや院生たちによってフェミニズムの視点を持った地理学的研究が盛んに行われていたようである(Longhurst 1994b)。ロングハーストがフェミニスト地理学者として1990年代半ば頃から旺盛な執筆活動に入った背景には、このようなワイカト大学地理学部という、フェミニズムを研究する上で整った環境があったからといえるだろう。現在も、ワイカト大学にはロングハーストの他にもジェンダーとセクシャリティの地理学を専門とする女性研究者としてリンダ・ジョンストン(Lynda Johnston)がおり、こうしたフェミニスト地理学の精神は現在も脈々と受け継がれているといえる。

それでは、学術雑誌に掲載された論文や代表的著書から、ロングハーストの研究を辿ってみよう。管見の限り、ロングハーストがからだと地理学に関する論文を学術雑誌に投稿し始めたのは、1994年の「いちばん身近な地理からにしよう—からだから:受胎能力の政治学」(*Australian Geographical Studies* 誌32巻)と、「フェミニスト地理学に対する反省と展望」(*New Zealand Geographer* 誌50巻)からである。IIの2で、1990年代の英語圏地理学において、身体を一種の空間としてみ直す動きが起こったことに触れたが、彼女もこの分野を担う若手研究者の一人だったといえよう。さらに翌年には、「身体

(the body)と地理学」(*Gender, Place and Culture*誌2巻)、「妊娠女性のスポーツ参加に対する言説的制約」(*New Zealand Geographer*誌51巻)を発表している。フィールドワークに基づいた実証的研究と、からだと地理学をめぐる理論的研究をクロスさせながら研究を進めていくスタイルは、このとき確立されたものであろう。その後も旺盛な執筆活動は続き、翌1996年には「フォーカスグループ再検討：ニュージーランド・ハミルトンにおける妊娠女性の地理的経験」(*Area*誌28巻)のようなフィールドワークの方法論に関する論考を、1997年には「(脱)身体化された((dis)embodied)地理学」(*Progress in Human Geography*誌21巻)と題して、近年の地理学で盛んとなっている身体をめぐる議論を展望している。同年には、「『ゴーイング・ナッツ』:妊娠女性を再現前する」(*New Zealand Geographer*誌53巻)も発表している。そして2000年に実証的研究である「妊娠に関する肉体記述(corporeographies):ピキニを着たかわいこちゃん」(*Environment and Planning D*誌18巻)と、地理学とジェンダーの問題を男性性と男性のアイデンティティに着目して論じた、「地理学とジェンダー:男性性、男性のアイデンティティ、男性」(*Progress in Human Geography*誌24巻)を発表している。さらに2001年にはRoutledge社から刊行されている『批判的地理学』シリーズの第11巻として、『からだ:流動的境界』を出版した。このほか同年には、前年の「地理学とジェンダー」の続編として、「地理学とジェンダー:これまでとこれから」(*Progress in Human Geography*誌25巻)も発表している。

2. 「からだ」へのこだわり

前章では、ジェンダーという概念を手掛かりに、女性の男性に対する従属の根拠となっていた性差が、実は社会的、文化的につくられたフィクションに過ぎないことをフェミニスト地理学があらわにしていったことを指摘した。しかし、1990年代を境に急増したジェンダー研究に対しては、早くからフェミニスト地理学の内部で批判が存在した。また、批判ではないが別の視点から身体にアプローチする研究もあり、ジェンダー研究への過度の偏重に歯止めをかける結果となった。ロングハーストのからだ研究も、こうした研究の延長線上にある。本節ではまず、ロングハースト以前の議論の内容について述べてから、彼女の主張をみていきたい。

フェミニスト地理学のジェンダー重視の傾向に注意を促す研究の一つに、前節にも登場したルイーズ・

ジョンソンの議論がある。彼女は、ジェンダーの問題が重視された結果、生物学的な性差(セックス)が、検討を要しない自明な存在として置かれたことを批判する。つまり彼女は、生物学な性差にも政治や社会が入り込んでいるという見方を持っていた。また、生物学的性差を無視して男女の平等をめざすジェンダーの議論では、結局のところ現実には存在するはずのない、当てはまる者など誰もいない「両性具有(androgyne)」の人間をモデル化することになりかねないと批判した(Johnson 1990)。

また、地理学の男性中心主義のなかで、女性とともに低く見られてきた肉体としての身体に、地理学を刷新する可能性をみた者たちもいた。例えばマクドウェル(2002b)は、生理や妊娠や分娩や授乳といった女性の肉体的経験が、空間性、境界、コミュニティといった既成の地理的概念にいかなる変革をもたらすのかに着目した。このほか、育児やケアといった「女性ならではの」経験が、フィールドワークの認識論や方法論にどのような刷新をもたらすのかに着目する論文(Nast 1994)もある。

肉体としての身体は、男女の肉体的差異の強調を性差別の正当化と重ねてみる立場の研究者からは戦略的に避けられてきたテーマであった。だが、妊娠や生理をまさに経験しているこのからだを語ることは、果たして本当に性差別を助長することになるのだろうか?その危険は十分認識しつつも、ここではむしろ、からだを語ることの意義を考えてみたい。まず、性差別からの女性の解放という問題に引き付けられれば、性差別という問題が、生身のからだの機能や制約とも深く関わり合っていることはすぐにわかる。例えばエルソン&ピアソン(2002)は、第三世界の世界市場向け工場では、結婚前の若年女性が積極的に雇用されるが、それは彼女たちが、結婚・妊娠を口実に辞めさせやすく、景気の調整弁として企業に都合がよい人材だからだと指摘している。この場合、若年女性が低賃金でしかも不安的な雇用環境に置かれている状況は、彼女たちの生身のからだを抜きに語れない。社会的性差は、まさに生身のからだの具体的な機能や経験に由来しているのである(Johnson 1990)。

しかし、私が生身のからだを重視する理由は他にもある。フェミニズム運動や障害者運動の軌跡を思い出すとき、私は、当事者たちが味わった生身の経験こそがこれらの運動を支える原動力となり、またその輪が広がっていく力を与えていたのではないかと思えるのである。一例を挙げると、1960年代後半から1970年代にかけて盛り上がりを見せたアメリ

カ・日本のウィメンズ・リベレイション（日本では「ウーマン・リブ」）では女性たちが集まり、これまで正面切って訴えられなかったり、自分自身でも言葉をつつけられずに一人で抱え込んだりしていた日常の様々な悩み、心の痛みを率直に語り合うということがよく行われたという。コンシャスネス・レイジングとも呼ばれるこの活動は、異なる女性たちの間に共通する問題を明確にし、運動を広げていくのに役立ったという（金井2008；萩野2014）。生身のからだから発せられる声や悲鳴を脇に置いて抑圧されている女性の経験を考えることは、その本質を見失いかねず「きれいごと」で問題を片付けかねないのではないだろうか。同様の問題意識を、ロングハーストも持っていたようである。彼女は、1990年代に増加した英語圏地理学の身体研究の内容を目の当たりにし、次のような批判を述べている。

「(英国で開催された)二つの会議では、『身体』や『身体化』という言葉こそ使用されていたが、そこでしばしば引き合いに出されたのは、猥雑なところが少しもない何らかの類の物質的身体であった。『身体』という言葉は地理学者たちは使用していたけれども、それは大抵、性的指向性も、ジェンダーも、障害の有無も、年齢も、肌の色も、エスニシティや人種もない、具体的特徴を欠いた身体であった。」（Longhurst 2001:4）

ロングハーストは、地理学で語られてきた身体を、筋肉の重さや皮膚の体温や、汗の臭いも感じさせないような、「不自然なほどこざいいな」なものか（Longhurst 2001:4）であると批判する。つまり、彼女に言わせれば、フェミニスト地理学を含め、英語圏地理学で語られ始めた身体は、生き物としてのからだが本来備えているはずのあらゆる特徴を欠いた、具体性に欠けるものだったのである。このような彼女の肉体としての身体、つまり生身のからだへのこだわりには、妊娠・出産・子育てをめぐる彼女自身の経験が大きく関係している（Longhurst 2001）。博士課程に在籍する直前、彼女は出産を終えたばかりの乳幼児の母親であった。妊娠によって女性のからだが急激に変化することが当事者と空間との関係に劇的な変化をもたらすことを、彼女は身をもって知っていた。妊娠するまで出入りしていた場所は徐々によそよそしさを増し、逆に、妊娠前はまるで知らなかった「母親」の世界への扉が、彼女に向けて急速に開かれていったのであった。彼女は数年後再び妊娠するが、大学での勤務中につわりに

襲われることを本気で心配し、万が一の場合に備えてバケツの容器をオフィス机の下に隠しておいたというエピソードは、肉体の変化がいかにも人と場所との関係性を揺るがし、その人の世界に対する感じ方に影響を与えるのかを生々しく伝えている。

ロングハーストの以上のようなからだに対するこだわりを確認したうえで、次節では彼女の妊婦研究の具体的な中身をみていきたい。その研究内容からは、身体という一見プライベートに見える中にも権力が働いているというフェミニスト地理学の主張を受け継ぎながらも、そこで回避されてきたからだの経験を生き生きと描き出そうという、彼女独自の視点を確認することができる。

3. 妊婦のからだを阻害する空間

ロングハーストの研究の最大の特徴は、プライベートな存在であるとしてこれまでの地理学では見落とされて身体という空間の中に、社会や政治が入り込んでいること、そしてこの問題を、妊婦のからだという肉体の次元から明らかにした点である。IIの1で述べたように、男性中心主義的な地理学では、人間の理性や合理性では語り得ないとみなされてきた存在を、それは自然の領分だと片付けて、ことごとく考察対象から外してきた。そうして枠外に置かれてきた対象には、病気や障害や生殖といった、生身のからだがつりリスクを伴った変化や、生理現象などが含まれる。これに対してロングハーストは、そのような地理学の中で他者化されてきた生身のからだに積極的に着目することで、妊婦のからだになど思いが行き届くはずもない、西洋社会を貫く男性中心的な考え方や、それが体現されている公共空間のありようをあぶり出そうとした。初めて学術雑誌に発表した論文のタイトルに、アドリエヌ・リッチの「いちばん身近な地理からにしようーからだから」という言葉を持ってきたところに、からだを地理学的な視点から真剣に考えなければならないという、彼女の強い決意がうかがえる。

ロングハーストは、彼女のホームグラウンドであるニュージーランド・ハミルトンをフィールドに、妊娠した女性たちがからだの変化が増すにつれて、徐々に公共の場から追いやられ家庭の中へと閉じ込められていく過程を、様々な女性の声から拾い上げた。例えば、妊娠初期と後期の妊婦には頻尿がつきものだが、ショッピングモールにおける妊婦たちの経験に光を当てたLonghurst (1994a)によれば、ショッピングモールに設置されているトイレは数が少なかったり、個室が狭くて妊婦には使用しづ

らかったりする。そのため、妊婦の中には、買い物時間を最小限に短縮したり、トイレの周辺で買い物を済ませるようにしたり、外出そのものを控えたりするケースがみられた。また、転倒の恐れがあるにも関わらずエスカレーターや階段にもっぱら頼らざるを得ない環境なども、妊婦たちには危険なものとして認識されていた。

では、妊婦たちが利用しやすいよう、施設の構造を細やかに改善すれば彼女たちの問題は解決するのだろうか？そうではない、とロングハーストはいう。彼女は、そうした施設の構造の背後にある、公共空間を支配する社会秩序にまで踏み込む必要がある、と考える。妊婦たちが公共空間で「居心地の悪さ」を覚える理由は、彼女たちのからだを排除しようとする空気が、言い換えれば秩序のようなものが、空間の中に充満しているからではないかとロングハーストは考えた。ある特定のからだをもつ人々に、居心地の悪さを感じさせる秩序とはいかなるものだろうか。この問いを考えるために彼女が参考とするのが、秩序と無秩序の関係を「^{けが}汚れ」の考察から論じた文化人類学者のメアリ・ダグラス(Mary Douglas)、ダグラスの議論をもとに、自己と他者との境界を攪乱し人間の心に不安を与える「アブジェクション」の問題を論じた、精神分析フェミニストのジュリア・クリステヴァ(Julia Kristeva)、そして、クリステヴァの議論をもとに身体性と空間の関わりについて論じた理論家、エリザベス・グロスツ(Elizabeth Grosz)等であった(Longhurst 2001)。

これらの研究者たちによれば、西洋社会の現実はやがて言葉によって通常切り取られ、分類(カテゴリー化)されている。しかしその結果、そのような体系的秩序付けと分類の中にすっきりと収まらない、あいまいな存在が当然出てくる。それらは、秩序を乱す「不浄」(ダグラス)、自己と他者との境界をあいまいなものにする「アブジェクション」(＝「嫌悪すべきおぞましいもの」⁵⁾の意、クリステヴァ)と名づけられ、環境を組織するために積極的に排除されるという。しかし、排除されたはずのあいまいな存在はことあるごとに現れ、秩序を攪乱しては私たちの不安や嫌悪感を呼び起こすのである。さらにグロスツは、ダグラスの不浄とクリステヴァのアブジェクションを私たちの生身のからだに引きつけて議論する。そして、生身のからだの内側から外側へと流れ出る様々な物質(bodily fluid)が、いかにからだの内と外との境界を揺るがし、自分とそうでないもの(他者)との境界を揺るがすものなのか、それゆえ、言語による秩序体系が確立された西洋社会でいかに忌避され、

無視されてきたのかを論じた。

以上の議論を元にすれば、輪郭に大きな変化が生じる妊婦のからだや、そこから時も場合も問わず外へと放出される様々な物質(尿、破水による羊水、吐瀉物、場合によっては胎児も含まれる)は、自/他の境界を流動的なものにし、また、自律的な自己という存在を脅かすものとなる。そして、西洋社会とは、こうした人間のコントロールが及ばない生身の肉体に対して、これを自然科学の領域に追いやるほかは、正面から扱うことを避けてきた社会である。こうして長い間公共空間は、妊婦を含め健常者ではない人々を阻害する空間であり続けたのである。予測がつかないからだをもった妊婦は徐々に家庭の中へとひきこもるようになり、医師ら専門家をはじめ、家族や恋人などの周囲の人々の管理下に置かれるようになる(Longhurst 2000)。そして、彼女たち自身の行動範囲が縮小していくのとは裏腹に、胎児がいる彼女のからだは、時には通りすがりの人たちからもレクチャーを受けるような、一種の公共物の性質を帯びてくるのである(Longhurst 2001)。

妊婦を阻害する空間の以上のようなあり方は、妊婦が直面する問題を単なる施設の物理的構造の問題として片づけてしまったり、逆に、実際にそこを利用する人々の生身のからだを想像することなしに、観念的に公共空間というものを考えたりするだけでは十分にみることは出来ない。私たちと空間との関係は、抽象の次元だけで考えていると生身のからだの経験をとり逃してしまおうし、逆にからだだけみても空間に深く根差しているものに気づくことができない。このことをロングハーストは、妊婦の経験という、地理学からみても、おそらく社会科学の領域全体からみてもユニークな題材を通して冷静に導き出すことに成功したといえる。

それでは、彼女の研究の課題とはなんだろうか？ロングハーストには、妊婦の経験を「きれいごと」として論じたくないという思いがたいへん強い。彼女の論文には、せり出していく腹、膨らむ乳房、頻尿、嘔吐、破水といった、妊婦にはつきものだが他の地理学者の論文ではあまり見かけない言葉が頻繁に現れ、しかもそれが具体的な生々しさをもって語られている。それは、このような事柄を避けては、空間、特に公共空間における妊婦たちの疎外の経験に迫れないと彼女が考えているためだ。彼女のこの視点は、フェミニスト地理学ですら正面から扱いつらかった女性の肉体を議論の俎上に乗せたという点で重要だろう。しかし、確かに妊婦の経験は「きれいごと」では済まされないだろうが、そのからだによって生じ

るのは、はたしてロングハーストが繰り返し述べるように苦痛だけだろうか。コントロールの効かないからだを抱えこまなければいけないことは、妊婦を肉体的にも社会的にも苦しめるだけだろうか。

例えばロングハーストは、見ず知らずの人が妊婦の腹に触れたがったり色々なアドバイスをしたりすることを、妊婦の主体性が失われ、胎児を入れておくだけの容器と同一視されていく過程であると否定的に解釈する。しかし、これは別の視点から見れば、当事者の輪だけにおさまりきらない社会的つながりが、妊婦を中心に原始的な形をとって出現しているともいえないだろうか。そしてそうしたつながりを欲しているのは、妊婦たち自身というよりはむしろ、一見「普通」でならん苦勞を抱えているようには見えない人たちの方なのかもしれない。

このように考えると、私にはロングハーストの研究が、コントロールが効かないからだ、もつといえ、妊婦のからだを抱えこんでいるどうしようもない「弱さ」が、世界に対して持つ意味に徹底的にこだわることができず、様々な理論を使って性急に答えを与えてしまっているように思えるのである。妊婦のからだ、社会によって一方的に無力化されるわけではないとロングハーストが希望観測的に述べるように (Longhurst 1994a)、妊婦と人々との関係性もまた、まさにその出会いの現場において様々な可能性に開かれているのではないだろうか。

ロングハーストの研究の第二の課題は、「自／他の境界を揺るがすからだ」というユニークな視点から妊婦の経験を検討しているにも関わらず、その解釈が十分でないように思われる点である。その境界のあいまいさゆえに人々から忌避されるという妊婦のからだを、別の視点から考えることはできないだろうか。

『からゆきさん』などの著作で有名な、詩人、女性史家、女性思想家の森崎和江に『いのち、響きあう』(森崎1998)という一冊がある。その中に「産むこと」と題された章があり、友人と雑談していた妊娠5か月の「私」が、もはや「わたし」という一人称では自分を語れないことに気づくという文章がある。

「『わたし』ということばの概念や思考用語に込められている人間の生態が、妊婦の私とひどくかけ離れているのを実感して、はじめて私は女たちの孤独を知ったのでした。それは百年、二百年の孤独ではありませんでした。また私の死ののちにもつづくものと思われました。ことばの海の中の孤独です。」(森崎1998:29)

上野千鶴子は森崎のこの体験を「自我の複数性の認識」(上野2013:25)と呼び、「過去から未来へとつながる現在としての『わたし』」。単独者以上の存在である『わたし』には、男も女もないはずだ(上野2013:30)と述べる。ここからうかがえるのは、人はこの世に生まれ落ちた瞬間から単独者ではありえないということ、今を生きる「わたし」の中には常に父母をはじめとする連綿と続くいのちのつながりがあることを忘れてはいけないということである。ここで問題となっているのは過去から未来へという縦のつながりからみた自我の複数性だが、おそらく横のつながりにもこのような自我のあり方は当てはまると思われる。私たちは独りのようでありながら、他者とつながりながら、「入れ子」(川上2007)のようになりながら生きている。妊娠という経験は、以上のことを思い起こさせてくれる唯一ではないが絶好の契機なのだ。上野は「自我の複数性」と言っているが、私はこれを「自我の解体」と呼びたい。

このような森崎の思想とロングハーストの研究を照らし合わせてみると、ロングハーストの研究では妊婦の自我が自明のように揺らぐことなく存在しているのである。彼女の研究では、周囲の環境や人々や胎児自身がしばしば妊婦の自立性を損なう存在として描かれる。これは、彼女が個人の自立性や自我を自明なものとしている証左となりうる。このことは厳しく言えば、フェミニスト地理学が批判していたはずの、自分と他のものとの間の境界を絶対的なものとしてみならず男性中心主義的な二項対立的な考え方の枠から、彼女もまた逃れられていないということではないだろうか。妊婦と周囲との関係をつながりではなく対立的にみてしまうところも、このような彼女の考え方が反映していると思われる。さらに、ここで問題となる自我の基準は、妊娠前のからだを持っていた意識や能力なのである。女性としての特徴がより乏しいからだを基準としているという点もまた、肉体としてのからだを研究の枠外に置いてきた男性中心主義と重なってみえるのである。

4. 「フィールド」に対する視点

本章の最後に、研究内容そのものではないが、ロングハーストの研究姿勢の独自性についても言及しておきたい。彼女の研究は、地理学の研究とはこうであるべきだという体系に基づいているのではなく、自分はこういう風に空間を経験してきたという彼女個人の日常の感覚に支えられている。このことが、彼女がフィールドワークの場や対象を選ぶ際の、こ

だわりと柔軟さに結びついている。こだわりとは、妊婦のからだという自分が実際に経験したものを基点にして、空間を見つめなおしたいという思いである。そして、柔軟さとは、コントロールが効かなくなり、自分にとってよそよそしい存在となったからだを通してみれば、どれほど慣れ親しんだ空間であっても新たな発見のあるフィールドになり得る、という確信のことである。妊婦のからだにこだわる、という点については前節で具体的にその内容をみてきたので、ここではフィールドワークの場と対象を選択する際の、彼女の考え方の柔軟さについて指摘したい。

フィールドワークに対するロングハーストの視点や考え方に他の研究者にはない独自性があることは、欧米の地理学において、伝統的にフィールドワークがいかなるものだったのかを考えれば明らかである。地理学が学問として制度化され始めた19世紀後半の時代から、フィールドワークとは、遠く離れた未知の土地への探検を意味してきた。そしてそのような中で興奮や刺激を伴いながら得られた様々な「発見」が、地理学に生命を与えてきたと考えられた(ドモシュ 2001)。また、フィールドとは、国益となる資源等が求められそうな空間のことであり、そのような空間を地図化することが地理学者の仕事だと理解されていた時代があった。どこを、どんな理由でフィールドにするのかは深く問われることはなく、フィールドワークを行うことも、なかば「必然」として受け止められていたといっても過言ではない。このような傾向は20世紀後半においても根強く、フィールドとはどこなのか、フィールドワークとは何なのかを真剣に問うことを困難なものにさせてきた(Nast 1994)。

しかし、以上のようなフィールドワーク観は、やがてフェミニスト地理学の厳しい批判にさらされるようになる。例えば、男性探検者とは異なる文脈と意識で海外をめぐる、イザベラ・バード(Isabella Bird)のような女性たちを再評価する動き(ドモシュ 2001)が現れたり、フィールドの設定が、その実きわめて意図的に行われるものであり、フィールドワークの内容そのものも決して中立ではありえないことを反省的・批判的に捉えなおす動きが現れたりした(Nast 1994)。地理学の中で無視されてきた人々の暮らしや声を拾い上げることを目的に誕生したフェミニスト地理学にとって、フィールドとは、誰から与えられるものというよりは、自身の問題意識を信じて取り戻していくものであり、どこをフィールドとするのか、誰を対象にするのか、そし

て、いかなる立場から研究を行うのかという問題は、それ自体重要な問いであった。

シンディ・カツツ(Cindi Katz)はかつて、「私はいつでも、どこでもフィールドにいる」と述べたが(Katz 1994:72)、フェミニストの視点に立てば、極端に言えば「フィールド足りえない」場などどこにも存在しないのである。問題意識さえあればどんな場所もフィールド足りうる。もし仮に、フィールドにならない場というものがあるとすれば、それはそのように見なす側のまなざしに問題があるのではないか。こうしたフェミニスト地理学者たちのフィールドに対する柔軟な考え方を素地にしながら、しかし、従来のフェミニスト地理学ですら避けてきたからだという存在に着目したのが、ロングハーストだったといえるのである⁶⁾。

IV おわりに

本稿では、フェミニスト地理学におけるからだをめぐる議論の展開を、フェミニスト地理学の誕生からロビン・ロングハーストの妊婦研究に至る道のりをたどることで検討してきた。

男性中心主義的な地理学の再構築を目指して出発したフェミニスト地理学は、ジェンダーという概念を武器に、それまで自然で自明なものとして捉えられてきた身体の社会的、空間的構築性をあらわにした。しかし、ジェンダー研究が増加する一方で、生物学的性差であるセックスの問題は棚上げにされる傾向にあり、この研究の空白を埋めたのがロングハーストの研究だったといえるだろう。生身のからだにこだわるという独特の研究視点と、妊婦というこれまでの地理学で全く取り上げられることのない研究テーマを持ちながらロングハーストは、からだを通して妊婦たちが公共空間で感じるよそよそしさや不便が、彼女たちを公共空間から家庭空間へと追いやり、彼女たちと空間との関係を決定する重要な要因となりえていることを具体的に明らかにしていった。

以上のようなからだに対するフェミニスト地理学の取り組みは、日本という場で生活しながら地理学について考え続ける私たちに、いかなる展望をもたらしてくれるのだろうか。ここではいったん「フェミニズム」「フェミニスト地理学」「ジェンダー研究」などの枠を超えて、「からだ」という視点から考えてみたい。

現在の日本はもはや高い経済成長はのぞめず、安

定した正規雇用の職をめぐって「椅子取りゲーム」のような状態になっている。契約や派遣といった非正規雇用が増大し、一つの場所で継続して働いていられるからこそ得られる安心感やアイデンティティは、もはや限られた人々だけが得ることのできる「特権」となりつつある。また、たとえ正社員として雇用されても、生身のからだの限界を無視するような働き方を強いられることも珍しいことではない。いずれの状況も、今日の日本社会において生身のからだというものがいかに軽視されているかを物語っている。そしてそれゆえに、今を生きる人々の経験を、個人と社会との利害が交差する「からだ」という空間から考えていくことが求められるのではないだろうか。

個々に空間を持つ人が集って出来上がった空間は、最終的には誰一人として疎外されることのないものであるべきだ。そのような空間が作られていく可能性を見出していくために、地理学がからだに着目していくことは重要であろう。しかし、それだけでは不十分である。どれだけからだに着目したとしても、人間のあり方の基準を「単独者」に置いている限り、人と人とのつながりや、そうしたつながりが作り出す空間は容易に見落されてしまう。この点が、ロングハーストのからだをめぐる議論の弱点であり課題であった。そして地理学とは、こうしたつながり(人と人、人とモノ(場所を含む)、モノとモノ…)を探り当てる学問であるべきはずなのである。このような点からみればフェミニズムもまた、女性たちの言葉にもならないような言葉を、地を這うような思いで拾い集め、独自の思想を紡ぎ出した「つながり」の学問であり、運動だったと考える。

付記

本稿は、2016年3月にお茶の水女子大学に提出した博士論文『農村に移住する若い女性と身体化される「場所」: 福島県昭和村からむし織体験生・織姫の語りから』の第Ⅲ章を大幅に加筆・修正して作成しました。改めて論文審査に加わって下さった5名の先生方に深く感謝申し上げます。なお、本研究にあたっては、2016年度松下幸之助記念財団研究助成、東海ジェンダー研究所研究助成の一部を使用しました。

注

- 1) 女性が男性と平等な主体となるために、からだの違いやその重要性を否定ないし矮小化しようとする立場は「性差ミニマリズム」と呼ばれ、代表的論者にシモーン・ド・ボヴォワール(Simone de Beauvoir)やシュラムス・ファイアストーン(Shulamith Firestone)などがある。他方、女性のからだの違いを女性というアイデンティティの基盤として位置づけ、からだの違いや、特に「生む性」としての能力を高く評価しようとした立場は「性差マキシマリズム」と呼ばれ、エレヌ・シクスー(Hélène Cixous)やリュス・イリガライ(Luce Irigaray)、ジュリア・クリステヴァ(Julia Kristeva)などのフランス語圏のフェミニストや、英語圏ではアドリエヌ・リッチなどが代表的な論者として挙げられる(荻野2002, 2014: 8)。
- 2) フェミニスト地理学のからだ研究と、文化・社会地理学における身体の物質性に関する研究の二つを織り交ぜて障害の問題を扱った論文集として、Chouinard et al.eds(2010)がある。
- 3) 「文化論的転回」自体は、地理学だけでなく広く人文・社会科学系の諸分野において1980年代後半から起こった。ここでは、文化の問題が人文地理学の中心課題として据えられる。ここで考えられる「文化」とは記号やシンボルの体系(Jackson 1989)のことであり、その体系を通してあらゆる領域の活動や社会関係、制度が生産されると理解されるものである。つまり文化は「社会的に構築されたもの」、「社会的行為者によって積極的に維持されるもの」、「人間の生活や活動の別の領域とも関わりを持つ柔軟なもの」(ミッチェル2002)とみなされるのである。このような文化の捉え方は、地理学では特に景観研究に取り入れられた。ここでは、景観がどのような意味やメッセージを込められて存在しているのか、それが人々によってどのように解釈されているのか、さらにそれらがどのようにして結果的に社会秩序を再生産する伝達装置として機能しているのかが争点となった(ダンカン2006)。
- 4) 当事者として障害者の自立の問題に関わっていた人類学者のロバート・マーフィ(Robert Murphy)は次のように述べている。

「一方に、社会と、その社会が与える行動の規範と評価の基準との関係ということがある。他方に、一般の人々の関心があり、欲求があり、努力がある。この両者はいつもうまい具合に折り重なり合うというわけにはいかない。いやむしろ、個人と文化とは本質的に対立関係にあるというべきだ。…身体麻痺の研究はこうした個の社会に対する闘いを見物するには絶好の闘技場となる。」(マーフィ 2006: 21-22)

- 5) 西川直子2002. J.クリステヴァ『恐怖の権力』、江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』261. 平凡社、より。
- 6) ロングハーストの妊婦研究のような、みずからのコントロールが効かないからだを題材とした著名な研究とし

て、ロバート・マーフィーの『ボディ・サイレント』(2006)がある。この作品は、脊髄腫瘍によって身体麻痺が進行していくみずからのからだをフィールドに、徐々によそよそしくなっていくからだを「異郷」にみだててその世界を内側から描き出している。

参考文献

- 上野千鶴子2013. 『〈おんな〉の思想：私たちは、あなたを忘れない』集英社.
- エルソン, D. ピアソン, R. 神谷浩夫訳2002. 「器用な指先が安い労働力を生み出す」のだろうか? : 第三世界の輸出製造業における女性雇用の分析. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』218-244. 古今書院. Elson, D. and Pearson, R. 1981. Nimble fingers make cheap workers: an analysis of women's employment in Third World export manufacturing. *Feminist review*7:87-107.
- 荻野美穂2002. 『ジェンダー化される身体』勁草書房.
- 荻野美穂2014. 『女のからだ：フェミニズム以後』岩波書店.
- 影山穂波2004. 『都市空間とジェンダー』古今書院.
- 金井淑子2008. 『異なっている社会を：女性学／ジェンダー研究の視座』明石書店.
- 神谷浩夫監修訳2002. 『ジェンダーの地理学』古今書院.
- 川上弘美2007. 遺跡の隙. 一冊の本2007年10月号：2-4.
- 木村オリエ2006. 郊外地域における男性退職者のコミュニティ活動への参加プロセス：多摩市桜ヶ丘団地の事例. 地理学評論79：111-123.
- 木村オリエ2008. 都市郊外における自治体のアウトソーシングと主婦の起業：多摩ニュータウン南大沢地区S社を事例にして. 人文地理60：301-322.
- 熊谷圭知2015. 現代日本の社会経済変化と男性／性の変容をめぐる試論：「場所」と「ホーム」の視点から. ジェンダー研究18：87-98.
- ダンカン, J. S. 西部均訳 2006. 意味付与の体系としての景観. 空間・社会・地理思想10：84-95. Duncan, J.S. 1990. Landscape as a signifying system. In *The city as text: the politics of landscape interpretation in the Kandyan Kingdom*:11-24 (Chap.2). Cambridge: Cambridge University Press.
- ドモシュ, M. 齋藤元子2001. 地理学の新しいフェミニスト歴史叙述をめざして. 空間・社会・地理思想6：150-160. Domosh, M. 1991. Toward a feminist historiography of geography. *Transactions of the institute of British geographers N.S.* 16: 95-104.
- 中島弘二2014. 泥, 石, 身体: 身体と物質性をめぐるポリテクス. 空間・社会・地理思想17：19-32.
- 西川直子2002. J. クリステヴァ『恐怖の権力』. 江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』260-272. 平凡社.
- 丹羽弘一1998. ジェンダーの風景, 知, そして第三の場所. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ：地理学的想像力の探求』162-174. 古今書院.
- バーネット, P. 吉田雄介訳1999. 社会変化, 女性の地位, 都市形態と発展のモデル. 空間・社会・地理思想4：57-65. Burnet, P. 1973. Social Change, the status of women and models of city form and development. *Antipode*5(3)：57-62.
- マクドウェル, L. 吉田容子訳2002a. 空間・場所・ジェンダー関係：第1部—実証主義フェミニズムと社会関係についての地理学. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』21-54. 古今書院. McDowell, L. 1993. Space, place and gender relations Part I: Feminist empiricism and the geography of social relations. *Progress in human geography* 17(2):157-179.
- マクドウェル, L. 影山穂波訳2002b. 空間・場所・ジェンダー関係：第2部—アイデンティティ, 差異, フェミニスト幾何学と地理学. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』55-76. 古今書院. McDowell, L. 1993. Identity, difference, feminist geometries and geographies. *Progress in human geography* 17(1):303-318.
- マーフィ, F. R. 著, 辻信一訳2006. 『ボディ・サイレント』平凡社. Murphy, F. R. 2001. (first published 1987) *The body silent: the different world of the disabled*. New York: W. W. Norton & Company.
- ミッチェル, D. 森正人訳2002. 文化なんてものはありやしねえ: 地理学における文化観念の再概念化に向けて. 空間・社会・地理思想7：118-137. Mitchell, D. 1995. There's no such thing as culture: towards a reconceptualization of the idea of culture in geography. *Transaction of the institute of British geographers N.S.* 20(1): 102-116.
- 村田陽平2009. 『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会.
- 森 正人2009. 言葉と物：英語圏人文地理学における文化論的転回以降の展開. 人文地理61: 1-22.
- 森 正人2011. 変わりゆく文化・人間概念と人文地理学. 中俣均編『空間の文化地理』113-140. 朝倉書店.
- 森崎和江1998. 『いのち, 響きあう』藤原書店.
- モンク, J. ハンソン, S. 影山穂波訳2002. 人文地理学において人類の半分を排除しないために. 神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』2-20. 古今書院. Monk, J. and Hanson, S. 1982. On not excluding half of the human in human geography. *Professional geographer* 23: 11-23.
- 吉田容子1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. 地理学評論69：242-262.
- 吉田容子2007. 『地域労働市場と女性就業』古今書院.
- 米津知子1991. 日本の母性はたかだか100年. グループ・母性解説講座編『母性を解説する：つくられた神話を超えて』110-124. 有斐閣.
- リッチ, A. 著, 大島かおり訳1989. 『血, パン, 詩』晶文社. Rich, A. 1986. *Blood, bread, and poetry: selected prose 1979-1985*. New York and London: W.W. Norton and co.
- ローズ, G. 著, 吉田容子ほか訳2001. 『フェミニズムと地理学：地理学的知の限界』知人書房. Rose, G. 1993. *Feminism and geography: the limits of geographical knowledge*. Cambridge: Polity press.
- Butler, R. and Parr, H. eds. 1999. *Mind and body space: geographies of illness, impairment and disability*. London: Routledge.

- Chouinard, V., Hall, E. and Wilton, R. eds. 2010. *Towards enabling geographies: 'disabled' bodies and minds in society and space*, Farnham: Ashgate.
- Jackson, P., 1989. *Maps of meanings*, Unwin Hyman: 38.
- Jonson, L. C. 1990. New courses for gendered geography: teaching feminist geography at the University of Waikato. *Australian geographical studies* 28: 16-28.
- Katz, C. 1994. Playing the field: Questions of fieldwork in geography. *Professional geographer* 46(1): 67-72.
- Longhurst, R. 1994a. The geography closest in- the body...the politics of pregnancy. *Australian geographical studies* 32(2): 214-223.
- Longhurst, R. 1994b. Reflections on and a vision for feminist geography. *New Zealand geographer* 50: 14-19.
- Longhurst, R. 2000. 'Corporeographies' of pregnancy: 'bikini babes'. *Environment and planning D: society and space* 18: 453-472.
- Longhurst, R. 2001. *Bodies: exploring fluid boundaries*. Oxford: Routledge.
- Massey, D. 1994. *Space, place and gender*. Minneapolis: University of Minnesota press.
- Nast, J. H. 1994. Women in the field: critical feminist methodologies and theoretical perspectives. *The professional geographer* 46(1): 54-66.
- The University of Waikato 2016. People. <http://www.waikato.ac.nz/wgm/people/robynl> (最終閲覧日: 2017年1月9日)
- Valentine, G. 1999. A corporeal geography of consumption. *Environment and planning D: society and space* 17: 329-351.
- Women and Geography Study Group of the IBG 1984. *Geography and gender: an introduction to feminist geography*. London: Hutchinson in association with The Explorations in Feminism Collective.
- Zelinsky, W. 1973. The strange case of the missing female geographer. *The professional geographer* 25(2): 101-105.